

2月23日 創世記11章1～9節

【解説と黙想】

バベルの塔

0. 「バベルの塔」の創世記における位置

創世記は1章から11章にかけて世界と人類の始まりを記している。そこで描かれていることは神がいかに人間を愛し、祝福を注がれ続けられたのかということと、人類がその祝福を拒絶するように罪に走り続けたということ。

「バベルの塔」の物語はその最終部に置かれている。人類が「天まで届く塔のある町を建て」（11章4節）ることにおいて、神の如くなろうとした愚かさは、あらゆる罪の根源にあるものと言える。人類が世界各地に散っているのは、その罪のせいだと創世記は語る。

1. 世界中は一つの言語で語り合う

人びとは、この始まりの時ににおいて、「同じ言葉」で話し合っていたという（それは何語であったのだろうか）。人びとは調和と一致を保っていた。人びとはただ言語が「同じ」であったというだけでなく、その意志や信仰においても「同じ」であったように見える。分断と対立がグロテスクにあらわされる2020年の世界を生きる我々にとって、それはユートピアのような、極めて良い世界であるように見える。

2. 天まで届く塔の野望

しかし、「人が心に思うことは、幼いときから悪い」（8章21節）。人びとは本来、極めて良いものさえ、良く用いることができない。

人びとが一致して考えたことは、天まで届く塔の町の建設であった。「天」は神がおられる場所を指す。人びとは互いに一致するという善と、道具を巧みに用いる知恵を合わせて（3節）、神の如くなろうとす

る悪を行なう。そこには、「有名になろう」という功名心の充足を狙う思いも含み込まれていた。さらに、「全地に散らされることのないようにしよう」という言葉からは、神から自由になろうとする思いが読みとれる。神は「地に満ちよ」（9章1節）と命じられていた。人びとはその言葉を拒絶する。

3. 混乱

主は人びとの間に降ることを通して、その間に混乱（バラル）をもたせられる（「降る」という表現には、塔を建て、神に肩を並べつつあると錯覚する人びとへの皮肉が込められているか）。そうして、人類は「同じ言葉」をバラバラにされ、全地に散らされることになった。分かり合えないという「混乱」を抱えたままに。

4. 預言者が指さした未来の実現

預言者ゼファニヤは、混乱を抱えた人間同士が、神に与えられた「清い唇」をもって「一つとなって主に仕える」（ゼファニヤ3：9）未来を指さした。それは「一つとなって」神の如くなろうとした過去を乗り越える未来である。

使徒言行録2章は、ペンテコステの時にその「未来」が実現したことを語る。それは聖霊が降ることで実現した。聖霊に満たされた、人びとは「ほかの国々の言葉」（使徒2：4）で話し出した。その多様な言語で語られていることは、ひとつのこと、「神の偉大な業」（同2：11）であった。聖霊が人びとの多様性を残したまま、「一つとなって」神に仕え、神をほめたたえる未来を導いたのである。聖霊の御力が、「バベルの塔」の罪を乗り越えさせていく。（柏木貴志）

《参照聖句》 イザヤ書14章13、14節、ゼファニヤ書3章9節、使徒言行録2章1～13節
 《教理問答》 子どもと親のカテキズム 問42、46

2月23日 創世記11章1～9節

【説教展開例】

バベルの塔

◇……………単元のねらい……………◇

人類はかつて「天まで届く塔のある町」を建てようと思決した。その決意には、自身が神の如くある、神に比類した者になるという野心と、「地に満ちよ」という神のご命令から自由になるとする罪が含み込まれていた。人類は、本来は良いものであるはずの「一つの言葉」と知恵を罪のために悪用する。その悪だくみを神は挫かれる。人間の幸いは神の如くあることではなく、神のご命令に従う生き方にあるからである。神の言葉に縛られる時、人間は神と、人と共に生きる。私たちの心の中にも「バベルの塔」がある。それが聖霊の御力に砕かれる時、共生の道が開かれていく。

「一つの言葉のために」

1. おはよう！

みなさん、おはようございます。今、先生は「おはよう」と日本語で挨拶をしたけれども、世界中にはいろいろな「おはよう」がありますね。たとえばお隣の韓国では、「안녕하세요」(アンニョン・ハセヨ)といいます。中国では「早上好(ザオ・シャンハオ)」。英語だと「Good morning(グッド・モーニング)」。などなど、世界中には5000個、いやもっと多くの「おはよう」があると言われています。

どうして、そんなにたくさんの言葉があるんだろう。世界がもし「一つの言葉」しか使っていなかったら、世界中の人とすぐにお話ができるし、英語の勉強をそんなに苦労することもなかったのに……、みんなはそんなことを考えたことないですか。

2. 世界は「一つの言葉」を話していた

実は昔々、そういう時代があったって、聖書に書いてあるんです。今日、みんなで読んだ創世記11章の最初に、「世界中は同

じ言葉を使って、同じように話していた」(1節)と書かれていました。

すごくないですか！ 今、世界中で、考え方が違う、言葉が違う、肌の色が違うということケンカをしたり、ひどいことを言い合ったりしています。けれども、昔々、イエスさまも、ダビデさんも、アブラハムさんも生まれる、そのずっと前に、世界中の人が同じ言葉でお話して、同じ神さまを信じて、生きていた、そんな夢のような時代があったんです。

3. 「一つの言葉」を悪用する

でもね、それは夢のような時代ではなかった。昔々の人も、私たちもそうだけれど、みんな、「罪」というものを持っていて、悪いこと——神さまを悲しませてしまうこと——をやってしまうんだね。昔々の人はせつかく「一つの言葉」でみんながお話できる、というすばらしい世界に生きていたのに、その「一つの言葉」である良さを使って、悪だくみを始めてしまいました。人間

は悲しいけれど、神さまから与えられた良いものを、悪いことのために使っちゃう時があるんですね。

みんなが同じ言葉を使っているから、話ははやい。みんなでエイエイオーと一つの目標を決めました。それは、今まで誰も見たことがないような、高い高い塔をつくらう！ ということでした。どこまで高いかというと、天まで届くような塔です。本当にそんな塔が造れるのか。

それができちゃうんですね。それが「バベルの塔」と呼ばれるものです。みんな、「一つの言葉」を使って、相談して、どういふうに塔を造るのがいいか、知恵を出し合いました。石を使うと削るのが大変そうだから、れんがにしよう！ とか、しっくいよりもアスファルトの方がかっこいいぞ！ とか、それで、もうあつという間に天まで届く塔ができちゃいそうになりました。けれども、どうしてそれが悪いことなんでしょう。楽しそうじゃないですか。

実はね、みんながたくらんでいたことがあるんです。何のために塔を造るか、その目的にみんなの悪だくみが込められていたんです。

どうして、高い塔を造ろうとしたのか。

昔々の人の声が聖書に記されています。「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう」（4節）。どうやら、みんな有名になりたかったようです。「あの人たち、スゴイ」と言われたかったようです。「あんな高い塔をつくれるなんて、神さまみたい」と思われたかったようです。神さまのように世界を見渡したかったのかもしれない。みんなが「一つの言葉」で相談して決めたことは、自分たちが神さまのようになることでした。オレたちはスゴいんだと

イバるためでした。本当は、どんなにいばつても、人間は神さまになれないのに。そんなことをしても幸せになれないのに。

人間は時にバカなことを考えます。

もう一つ、こんなことも言っていました。「全地に散らされることのないようにしよう」（4節）。それは、神さまの言うことなんて聞きたくないということなんです。神さまは、昔々の人に「産めよ、増えよ、地に満ちよ」（9：1）と言われ、世界中に神さまの祝福を拡げなさいと命じられていました。その御命令に対して、イヤだ！ と言っているんですね。でっかい塔を造ったら、もう、みんなここに集まってきて、神さまの言ったことと逆になる。オレたちが神さまの御命令を超えるんだ、エッヘンと考えました。

4. 神は全地の言葉を混乱させられる

さて、それからどうなったでしょう・

——神さまが怒って、降ってこられる。

そうですね。みんなが天まで届く塔の完成を見て、いやはやついに神さまに肩を並べましたなあ、なんて満足している時に、神さまは天から降ってこられます。実は、塔は全然、天まで届いていなかったんですね。神さまから見れば低い低いものだった。それはそうです。人間が神さまに肩を並べるなんてありえません。

神さまは、みんなが「一つの言葉」で話しているから、こんな愚かなことを考えるんだということで、言葉を「混乱」させられます。いろいろな言葉をつくられて、みんなが「一つの言葉」で話すことができなくされます。みんながバラバラにされます。

5. 一つとなって主に仕える

すると、どうでしょう。それまで、みんなが「一つの言葉」を話して、「一つの言葉」で神さまのことを語り合うことができていたのに、もうそれができなくなりました。神さまを信じることも言葉と一緒にもつともつ「混乱」しちゃったんですね。それは本当に悲しいことです。

だから、たくさんのお祈りがささげられました。みんなで一緒にもう一度「一つの言葉」で神さまを語り合いたい！ 一つになって神さまにお仕えしたい！ そういうお祈りが長い時間をかけてささげられました。

で、実はね、今、みんなは世界中の神さまを信じている人たちとお友だちになることができるんです。みんな、ペンテコステの時のことを覚えている？ 「一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほか

の国々の言葉で話し出した」(使徒2:1)。今、世界中にはいろいろな言葉があります。いろいろな言葉で、神さまのことがお話されています。それは昔の人たちが良いことを悪いことに用いてしまった結果だったけれど、でも、神さまは人間が悪く使ったことを良く用いることができるお方です。

私たちはいろいろな言葉で神さまを賛美することができます。それは素晴らしいことです。聖霊の神さまが私たちの間に満ちてくださる時に、私たちは「一つとなって」それぞれの違いを認め合いながら、世界中の人たちとお友だちになることができます。愛し、愛されることができます。聖霊の神さまの力です。それこそ、本当に素晴らしいことじゃないですか。シャローム！ おっとこれはヘブライ語ですね。

(柏木貴志)

《今週の暗唱聖句》

その後、わたしは諸国の民に、清い唇を与える。彼らは皆、主の名を唱え、一つとなって主に仕える。(ゼファニヤ書3章9節)

2月23日 創世記11章1～9節

【幼稚科】

バベルの塔

バベル・クイズ！

- 1 先生はあらかじめいくつかの「もの」を用意しておきます。例えば、「人形」、「絵本」、「ミニカー」、「マンガ」、「鉛筆」、「ノート」など、それぞれの教会ですぐに用意できるものでよいです。（キャラクターものは避けた方がよいと思います）。
- 2 先生は「1」で用意した「もの」の名前をカルタぐらいの大きさに紙を切って、あらかじめ名前を書いておきます。ただし、名前は外国の言葉（英語、中国語、韓国語……など）です。一つの「もの」にいくつかの外国語のカードを用意します。このカードは子どもに見せるわけではなく先生用です。先生が発音できるように事前に調べて書いておきます（スマホやインターネットで調べればきっと簡単にできるでしょう）。「もの」と用意する「カード」の枚数は出席する子どもを見込んで考えてください。
- 3 子どもたちと先生が輪になって座ります。子どもたちの前に用意した「もの」をずらっと並べます。
- 4 先生はゲームの説明をします。ゲームはカルタのイメージです。先生がカードきって順番に読みあげます。子どもたちは先生が読み上げた言葉の響きから「もの」をイメージして、これだと思った「もの」をゲットします。馴染みのあまりない外国の言葉のカードを忍ばせておくとさらに盛り上がるかもしれません。
- 5 先生は子どもたちにゲームの感想を聞いてみます。子どもたちは自分が知らない外国語が沢山あることが分かるかもしれません。うまくゲットできなかった理由を考えてみるのもよいでしょう。最後には子ども説教の振り返りをして締めくくります。

2月23日 創世記11章1～9節

【小学科上級・中学科】

バベルの塔

1. 創世記11：1～9を読みましょう。

①シリアルで人々は何をしようと思いましたか？ その理由は何でしたか？

②彼らの言葉から、どのような態度が見られますか？

③彼らの考えと神さまの考えはどう違いますか？（創世記9：1参照）

④神さまは何を防ごうとされましたか？

⑤この問題に神さまが用意された解決策は何でしたか？

⑥神さまが働かれて、人々はどうなりましたか？

⑦技術の進歩や人間の知恵には、どのような危険な面がありますか？